



バンコクのスラムに暮らして30年 —山岳部、ヒマラヤ、難民との出会いから国際協力を考える—

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

●公益社団法人シャンティ国際ボランティア会・アジア地域ディレクター

私が所属する（公社）シャンティ国際ボランティア会は、2020年からの未曾有のコロナ禍に苦悩し続けている。昨年の2月のミャンマーのクーデター政変、タイ国境への難民流出。同年、8月のアフガニスタンの政権転覆に伴う人道危機。コロナ禍に加えて社会の大混乱が重なり事務所の存続やスタッフの生命に重大な影響をもたらした。子どもたちの教育も2年近く閉ざされた。

私がこの仕事に関わった40年前からを振り返ると、高校で山岳部に入り、大学では社会福祉学部に進んだのがそもそもの始まりだった。冒険家の植村直己さんに憧れて1979年に神々の座を擁するネパール、ヒマラヤのトレッキングをした。ポーターを雇ったら小さな子どもだった。自分の身体より大きな荷物を大人に混じって背負っていた。8,000メートル級の白銀の山々が連なる麓の村々では、山を一つ超えると民族や宗教が変わる。ヒンズー教から仏教、ラマ教と変わっていった。何もかもが未知の世界で衝撃の連続だった。

ネパールから無事にバンコクへ戻った。もう二度と海外には来ないだろうと思い、バンコクからマレーシア、シンガポールへと電車とバスを乗りつないでの熱帯の陸路の旅だった。登山の垂直の世界から広い人間の水平の世界へのロマンや冒険心が生まれた。

日本に帰国した直後に兄が26歳の若さで交通事

故死。泣き崩れた母親。悲しみをじっと堪える父親の姿と兄の無念。「人間はいつ死ぬかわからない。兄の分まで精一杯、悔いのない生き方をしたい」。その年の暮れ、タイ・カンボジア国境のカンボジア難民の地獄絵のような難民キャンプの状況を伝える報道に接した。難民キャンプの生と死が兄の死と重なった。

兄の死の悲しみが癒されぬ両親には、大学の研究生として福祉の勉強にタイに半年行くことにして、難民キャンプのボランティアに参加した。日本の「難民元年」や「国際ボランティア元年」と呼ばれる1980年。多くの日本の若者が国境を超えてタイに渡った。

最初は、タイ・カンボジア国境の難民キャンプで、子どもたちに本を提供する移動図書館活動などに関わった。5年が経過して専門性と英語の壁に突き当たった。国際協力と英語を学びたくて1年間、米国の大学院で国際協力を学ぶ。国際NGOの先進国の米国に暮らして「日本でも必ずNGOの時代が来る」と確信した。しかし、日本では、NGOや国際ボランティアが仕事で成り立つ時代ではなかった。

米国での学びが終わってから東海岸から西海岸へと陸路を友人と車で横断。米国の広大さに圧倒されシアトルから北京へ。米国の次は必ず中国の時代が来るとの予感から鉄道で北京から雲南省の

昆明への旅。

米国からタイに戻って5年。私は首都バンコクの中心部から3キロも離れていないクロントイ・スラムに暮らすことを決めた。外国人がスラムの問題を知るには、スラムに住む必要がある。スラムの人々と共に夢を語り、スラムの人々の目線で行動するのがNGOの醍醐味であり「使命」だと確信していた。「ミパド」——「ミッション」「パッション」「ドリーム」の頭文字を国際協力の信条に「現場主義」を大切にしながら関わり続けた。

実際にスラムに暮らし始めると様々な試練に直面した。熱帯の暑さに加えて貧困と劣悪な居住環境、麻薬問題や賭博も横行していた。ゴミとドブの腐った匂いに悩まされた。スラムの家は密集しているので、一度、火事になると一瞬のうちに火の海になる。頻発する火事に夜も眠れずに怯えました。

希望と絶望が混沌する中で、スラムの持つ不思議な活力にも魅せられた。スラムに家族と共に住むと決めた時、「タイ社会のゴミ捨て場」と呼ばれたスラムを、花と緑に囲まれたタイで一番美しい地域にしたいという「夢」があった。図書館で、子どもたちが本を読み、伝統舞踊や音楽、芸術活動が出来る最高のモデルにしたかった。

私たちが長年支援する別のスラムの図書館からはスラムの貧困と家庭内暴力を克服して、タイ外務省きつてのロシア語専門家としてプーチン大統領とタイの首相などの通訳として活躍した外交官も生まれた。

新型コロナが感染し始めた2020年の1年間は、タイでは新型コロナの感染は極めて少なく東南アジアの優等生だった。しかし、スラムは貧困が集まり、人口が密集している。2021年、4月頃からはカンボジア人などの移民労働者、社会の最底辺で働くエッセンシャルワーカーが暮らす地域を中心に感染爆発が発生。スラムの家は、6畳一間に一家5人、6人が暮らす。一人が感染すれば全員が感染する。感染して亡くなっても、家族も感染していて葬儀も出せず、即火葬されてしまった私たちの団体の元図書館ボランティアの女性の例もある。

スラムの外見がどんなに変わっても簡単には変わらないのがスラムに住んでいるだけで偏見と差別の対象になることだ。タクシーは、スラムと行き先を告げると乗車拒否は日常茶飯事。私の2人の子どもたちは、小学校からスラムの外の学校に通っていたが、スラムに住んでいることを隠し続けていた。スラムに住んでいることを知られると一瞬にして友人を失うからだ。「私はスラム生まれのスラム育ち。いつまでスラムに住み続けるの」と高校3年の時に娘に泣かれた時は、言葉を失い悩んだ。

その娘は、今、奨学金を受けてスーパーグローバル大学に指定された東京の大学に在籍し、多くのアジアからの留学生と共に国際協力を学ぶ。ルームメイトはミャンマー人の留学生だ。

同じスラムの家で生まれ育った長男はタイの大学を卒業した後、日本に移り、タイから受け入れる介護関係の研修生の通訳として働く。タイと日本の関係といえば、20年前はタイ人が日本で働くことは一部の職業を除いて想像できなかった。

世界の中での日本の位置が大きく変わってきたことも、40年間にわたりスラムに暮らしながら感じてきたことだ。経済だけでも1989年頃はGDPが世界2位にあり頂点にあったが、それから停滞、そして衰退が起こっている。2018年には国の豊かさの象徴といえる一人当たりのGDPは26位、2020年には平均賃金はOECD加盟国のなかで22位に落ち込んでいる。タイから日本への観光客は2012年に266,040人であったが、2014年には657,570人、2019年には1,318,977人と激増中。日本からタイへの観光客も1,806,340人に迫る勢いだ。

ロシアのウクライナ侵攻だけでなく未曾有の新型コロナ問題もまだ先が見えていない。

タイでは隣国との陸の国境は固く閉ざされたままだ。私の夢もまだ道半ば。試行錯誤はこれからも続く。国際協力そのものだけでなく、スラムから行動しながら様々なアジアの文化や価値観、視点を伝えて行きたい。コロナ禍で分断された世界を新たに「伝える」「つなぐ」「創る」も大切な使命だ。